

イチゴ炭疽病防除対策(技術情報1号)

平成15年4月30日
熊本県病害虫防除所

イチゴ炭疽病は、親株床や育苗床でイチゴの葉や葉柄、ランナー等に発病し、症状が進むと株全体が萎凋し枯死します。また、高温多湿条件下で発生しやすく、風雨によって感染、発病が助長されます。

本県では、平成14年に親株床及び育苗床で多発生し、苗不足などの被害をもたらしました。多発生となった要因としては、4月下旬から5月中旬の気温が高く、降雨が続いたためと考えられます。

昨年発生が見られた圃場などでは、土壌中の病原菌密度や保菌親株などの感染源が多く存在するため、今後の適切な防除と管理が重要です。

1 防除上注意すべき事項

- (1) 親株床及び育苗床での雨よけ栽培は、本病の発病抑制に効果が高い。
- (2) 親株床及び育苗床は排水に留意し、全面マルチなどを行い、降雨や灌水による地面からの泥水の跳ね返りを防止する。
- (3) 発病後の薬剤散布では効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後には感染しやすいので、防除を徹底する。
- (4) 薬剤散布は株元まで十分かかるように行い、葉かき直後などに実施する。
- (5) 罹病株があると、それが伝染源となり、降雨や灌水により急速に蔓延するので、被害茎葉や被害株は速やかに除去し、処分する。
- (6) 無病親株から採苗し、育苗床は病原菌の汚染のない圃場を選ぶ。
- (7) 育苗ポットの間隔は広めに取り、不要な下葉などは除去して通風採光を良くする。
- (8) 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、薬剤は系統を替えてローテーション使用を行う。

2 イチゴ炭疽病に登録のある農薬 (熊本県病害虫防除基準より抜粋)

薬剤の系統等	商品名	使用濃度 (倍)	使用基準		注意事項
			使用時期 (収穫前日数)	使用回数	
グアニジン系	ベルコート水和剤	1,000	育苗期/5回以内		
ストロビルリン系	アミスター20フロアブル	2,000	苗床:前日まで/4回以内 本圃:前日まで/3回以内		浸透性展着剤は混用しない。高温多湿時薬害
有機硫黄剤	アントラコール顆粒水和剤	500	仮植栽培期/6回以内		アルカリ性薬剤との混用はさける。
	ジマンダイセン水和剤	600	仮植栽培期但し収穫76日前まで/6回以内		高温多湿時、軟弱苗等薬害。アルカリ性薬剤との混用はさける。
有機銅剤	キノドーフロアブル	500~800	育苗期/3回以内		水和硫黄剤、ジネブ剤との混用はさける。
微生物剤	バイオトラスト水和剤	1,000~2,000	育苗期~前日まで/ー		果実の汚れ。
その他	オーソサイド水和剤80	800	30日まで/2回以内		高温時、軟弱等薬害
その他	テランフロアブル	1,000	育苗期/2回以内		

注意1:この一覧表は、系統別、収穫前使用日数(短い順)、商品名(アイエオ順)に掲載。

注意2:農薬使用にあたっては、ラベル等で使用方法や使用上の注意を十分確認すること。

◎農薬は適正に使用しましょう!

- ・農薬は農薬取締法によって使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍率、収穫前日数、総使用回数などが定められています。ラベル等をよく読んで正しく使用するようにしましょう。
- ・現在農薬登録のないものや、使用する農作物に適用のないものは絶対に使用してはいけません。

熊本県病害虫防除所ホームページアドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>